

平成17年度 [第17-K1510-01号]
二級河川巴川（麻機遊水地）河川調査に伴う風土・史跡調査業務委託

報 告 書

平成18年3月

静岡県静岡土木事務所

目 次

1	調査の目的	1
2	調査内容	2
3	調査体系	2
4	調 査	4
4-1	調査概要	4
4-2	麻機遊水地の地理的な理解	11
1)	地形・地質の資料整理	11
2)	最近の調査から言えること	19
4-3	麻機遊水地周辺と人の関わり	23
1)	居住環境の資料整理	23
4-4	麻機遊水地の風土・史跡	40
1)	風土の資料整理	40

(3) 文化財等

①文化財

麻機地区及び周辺の文化財は、県指定の浅間神社の鰐口と池ヶ谷のトウツバキがある。

図面記号	指定内容	指定年月日	所在地	備考
B 1	県指定工芸品 鰐口	昭和 38 年 2 月 19 日	静岡市葵区 北 1763	銘文浅服浅間有衆奉納也仍如件
B 2	県指定天然記念物 トウツバキ	昭和 47 年 9 月 20 日	静岡市葵区 池ヶ谷 150	

(資料：静岡市の文化財課)

②遺 跡

麻機地区及び周辺の遺跡は次のとおりである。

■麻機地区及び周辺の遺跡

番号	遺 跡 名	時 代	種別	所在地	遺構・遺物	備考
1	北砦	中世	城館	北		消滅
2	羽高古墳	古墳(後)	古墳	羽高	横穴式石室・須恵器	
3	有永前田遺跡	縄文(後)	散・集	有永	縄文土器	一部残
4	有永古墳	古墳(後)	古墳	有永	前方後円墳・須恵器	一部残
5	平屋古墳	古墳(後)	古墳	南根神	横穴式石室	
6	八津口古墳	古墳	古墳	南八津	横穴式石室	
7	谷久保古墳	古墳	古墳	南草場	横穴式石室	
8	マルツツコウ古墳	古墳	古墳	南谷久保	横穴式石室	
9	時ヶ谷遺跡	縄文(早)・弥生	散布地	南時ヶ谷	石錘・打製石斧・石鏃・弥生土器・? 状耳飾	
10	唐瀬古墳群(1号～3号墳)	古墳		南唐瀬	横穴式石室(1号墳玉類、須恵器舎)	
11	池ヶ谷古墳	古墳(後)	古墳	池ヶ谷	横穴式石室	一部残
12	池ヶ谷遺跡	弥生(後)古代(平安)	水田	池ヶ谷	水田畦畔・大足・田下駄・火鑽臼	
13	「安部郡印」出土地	古代		東		
14	惣ヶ谷古墳群1号墳	古墳(後)	古墳	南沼上惣ヶ谷	横穴式石室・円墳・周溝に中世墓2・和鏡・鈴付銅釧・鉄鏃	消滅
	惣ヶ谷古墳群2号墳	古墳(後)・中世			横穴式石室	
15	小淵ヶ谷古墳群(1・2号墳)	古墳	古墳	南沼上小淵ヶ谷		
16	三滝ヶ谷古墳群1号墳	古墳(後)	古墳	南沼上薬師ヶ谷他	横穴式石室・勾玉・菅玉・大刀・鉄鏃	消滅
	三滝ヶ谷古墳群2号墳				横穴式石室・土師器・鉄鏃・鏡	
	三滝ヶ谷古墳群3号墳				横穴式石室・大刀	
	三滝ヶ谷古墳群4号墳				横穴式石室・須恵器・耳環	
	三滝ヶ谷古墳群5号墳				横穴式石室・組合箱形石棺・金銅性丸玉	
	三滝ヶ谷古墳群6号墳				横穴式石室・金銅性丸玉・鉄鏃	
	三滝ヶ谷古墳群7号墳				横穴式石室・須恵器	
17	上坂古墳群	古墳(後)	古墳	北沼上		
18	井戸ヶ谷古墳	古墳(後)	古墳	北沼上井戸ヶ谷	前方後円墳・須恵器	周辺に散在
19	佐敷堂遺跡	縄文～古代	集落	南沼上佐敷堂	住居跡・縄文土器・弥生土器・菅玉	消滅
20	南沼上諏訪神社古墳	古墳	古墳	南沼上		
21	水梨古墳群(1～2号墳)	古墳	古墳	瀬名水梨	横穴式石室(1号墳のみ)	
22	利倉神社上古墳	古墳		瀬名水梨	円墳	
23	切石遺跡	古墳	集・散	瀬名切石	土師器・須恵器	
24	上土遺跡	弥生(中)～近世	水田	加藤島	水田跡	
25	長崎鼻遺跡	縄文(中)	集落	南沼上長崎鼻	縄文土器	
26	南沼上古墳群1号墳	古墳	古墳	南沼上	土師器	消滅
	南沼上古墳群2・3号墳					
	南沼上古墳群4号墳				土師器	
	南沼上古墳群5号墳					
27	川合遺跡	弥生～近世	集・墓	川合	住居跡・水田・溝・土坑・井戸・須恵器・土師器	一部残

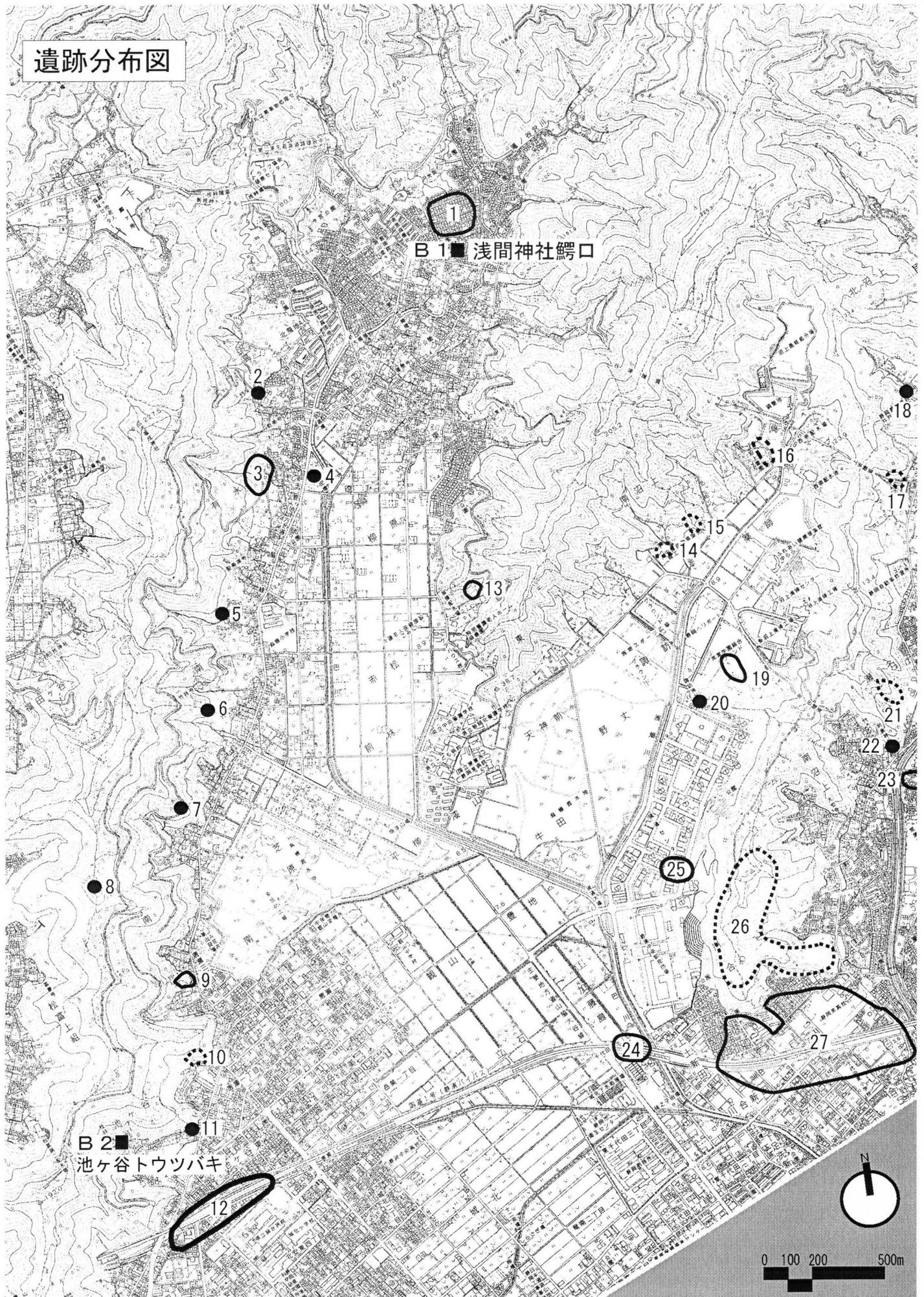
資料：静岡市遺跡 1991 年静岡市教育委員会（図面NO9・地名表）

■周辺の遺跡

図外	権現谷古墳群(1～3号墳)	古墳(後)・中世	古墳	瀬名権現ノ谷	前方後円墳・須恵器・中世蔵骨器	一部残
	権現谷古墳群(4～7号墳)				横穴式石室	
	瀬名古墳群1号墳	古墳 (4号墳欠番)	古墳	瀬名・鳥坂	円墳	消滅
	瀬名古墳群2号墳(マルセッコウ)				木炭柳・木棺直葬・大刀・鉄鏃	一部残
	瀬名古墳群3号墳				方墳・横穴敷石室・大刀・須恵器	一部残
	瀬名古墳群5号・6号墳				前方後円墳	
	瀬名古墳群7号・8号墳				円墳	
	東下遺跡	古墳	散布地	瀬名東下	土師器・須恵器	
	瀬名遺跡	弥生～近世	田・墓	瀬名	方形周溝墓・水路・畦畔・弥生土器・土師器	一部残
	瀬名川遺跡	弥生(後)	集落	瀬名川	弥生土器・木製品	

資料：静岡市遺跡 1991年静岡市教育委員会（図面N〇9・地名表）

遺跡分布図



凡例 ● 古墳 ○ 古墳群 ○ 遺跡 ■ 県指定文化財

(4) 社寺仏閣

麻機地区及び千代田地区一部の社寺仏閣は、次のとおりである。

a) 神社

神社は下表のとおりであるが、他地区から合祀した神社がいくつか境内に存在する。

神社一覧表

地 区	神社名	地 区	神社名	地 区	神社名
①池ヶ谷地区	天満宮 山神社	⑥北地区	浅間神社 西宮神社 荒神社 神明宮 津島社 市杵島姫社 今宮天神社 三峯神社	⑧千代田地域 (一部)	諏訪神社 神明宮 神明社
②南口地区	神明宮 春日神社 御嶽神社				
③南奥地区	八幡宮 天神社				
④有永地区	大御戸神社 稻荷神社 天神社 山神社	⑦東地区	日賀美神社 金刀比羅神社 稻荷神社 鈴石神社 火産霊神社		
⑤羽高地区	津島神社				

b) 神社概要

①池ヶ谷地区

天満宮	位 置	池ヶ谷 4 7
	祭 神	菅原道真命 (すがわらみちざねのみこと)
	例 祭 日	10月16日
	社 本殿	1 m ²
	殿 拝殿	40m ²
	等 鳥居	高さ 8 尺
	境 内	2 7 7 m ²
	由 緒	創建年不詳 古くは天神社と称したが、明治 1 3 年に天満宮と改称
境内神社	荒神社	
山 神	位置	池ヶ谷 2 1 番地小字「山の神」があるが現今祠っていない。

②南口地区

神明宮	位 置	南 6 4 5
	祭 神	天照 _k 皇大神 (あまてらすおおみかみ)
	例 祭 日	10月16日
	社 本殿	1.32㎡、間口2尺、奥行3尺
	殿 拝殿	
	等 鳥居	大正元年鳥居の新設
	境内	504.9㎡
	由緒	往古不詳、文政五年再建
	境内神社	春日神社 (旧村社)
春日神社	位 置	南 4 0 5
	祭 神	天兒金命 (あまのこかねのみこと)
	例 祭 日	10月15日
	社 本殿	間口3尺、雨覆4尺、雨覆間口4尺、奥行1間
	殿 拝殿	
	等 鳥居	7尺、明5尺
	境内	
由緒	明治35年	
境内神社	無	
御嶽神社	位 置	南 深山2632の2
	祭 神	国常立命 (くにとこだちのみこと)、大己貴命 (おおむなちのみこと)、少彦名命 (すくなひこのみこと)
	例 祭 日	10月23日
	社 本殿	4.125㎡
	殿 拝殿	
	等 鳥居	
	境内	165㎡
	由緒	
境内神社	無	

③南奥地区

八幡宮	位 置	南 1 4 8 5
	祭 神	品陀和気命 (ほんだわけのみこと)
	例 祭 日	10月16日
	社 本殿	8㎡、間口4尺、奥行5尺
	殿 拝殿	20㎡
	等 鳥居	高さ7尺
	境内	554.4㎡
	由緒	創建年不詳、文政年度拝殿と共に再建したと言う
境内神社	山神社	
天神社	位 置	南 (大沼家で祀る)
	祭 神	
	例 祭 日	
	社 本殿	
	殿 拝殿	
	等 鳥居	
	境内	
由緒		
境内神社		

④有永地区

大御戸神社	位 置	有永 8 9 3
	祭 神	天照大御神（あまてらすおおみかみ） 速須佐之男命（たけはかすきのをのみこと） 品陀和氣命（ほんだわけのみこと）
	例 祭 日	10月16日
	社 本殿	1.8m ² 、間口3尺5寸・奥行4尺
	殿 拝殿	29.16m ²
	等 鳥居	8尺・明7尺
	境内	442.2m ²
	由緒	創建年不詳
	境内神社	無
稻荷神社	位 置	今は存在しない
	祭 神	保食命
天神社	位 置	大御戸神社に合併（幡谷氏祀る）
	祭 神	
	例 祭 日	10月16日
	社 本殿	
	殿 拝殿	
	等 鳥居	
	境内	
	由緒	
	境内神社	無
山神社	位 置	有永
	祭 神	
	例 祭 日	10月16日
	社 本殿	
	殿 拝殿	
	等 鳥居	
	境内	
	由緒	
	境内神社	無

⑤羽高地区

津竈神社	位 置	羽高 1 5 8
	祭 神	建速素盞鳴男命（たけはやすきのをのみこと）
	例 祭 日	7月15日
	社 本殿	9.9m ² 、間口3尺・奥行4尺
	殿 拝殿	24.8m ² 、間口2間3尺・奥行2間
	等 鳥居	高さ8尺・明7尺
	境内	495m ²
	由緒	創建年不詳、文政年間再建の記録が存在する。
	境内神社	無

⑥北地区

浅間神社	位 置	北1762
	祭 神	木花之佐久夜毘売命 (このはなのさくやひめのみこと)
	例 祭 日	10月16日
	社 本殿	5m、間口1間1尺・奥行1間5尺
	殿 拜殿	34.6m、間口3間3尺・奥行2間3尺
	等 鳥居	高さ1丈・明9尺
	境内	2,284m ²
	由緒	創建年不詳、明治元年に静岡神社を払い受け、大正元年に大修理。
	境内神社	無
西宮神社	位 置	浅間神社の向かって右
	祭 神	事代主命
	例 祭 日	10月16日
	社 本殿	旧間口1尺2寸、奥行2尺
	殿 拜殿	
	等 鳥居	
	境内	
	由緒	創立年不詳
	境内神社	無
荒神社	位 置	浅間神社の向かって右
	祭 神	火産霊命、奥津彦命、奥津姫命
	例 祭 日	10月16日
	社 本殿	旧間口1尺3寸、奥行2尺
	殿 拜殿	
	等 鳥居	
	境内	
	由緒	創建年不詳
	境内神社	無
神明宮	位 置	浅間神社の向かって右
	祭 神	天照大御神 (あまてらすおおみかみ)
	例 祭 日	10月16日
	社 本殿	旧間口1尺3寸、奥行2尺
	殿 拜殿	
	等 鳥居	
	境内	
	由緒	創建年不詳
	境内神社	無
津島社	位 置	浅間神社の向かって右
	祭 神	建速素盞鳴男命 (たけはやすさののみこと)
	例 祭 日	10月16日
	社 本殿	
	殿 拜殿	
	等 鳥居	
	境内	
	由緒	創建年不詳
	境内神社	無
市杵島姫神社	位 置	
	祭 神	市気嶋姫命
	例 祭 日	10月16日
	社 本殿	旧間口1尺、奥行1尺7寸
	殿 拜殿	
	等 鳥居	
	境内	
	由緒	創建年不詳
	境内神社	無
今宮天神社	位 置	浅間神社の向かって左
	祭 神	菅原大臣
	例 祭 日	10月15日
	社 本殿	旧間口1尺5寸、奥行2尺5寸
	殿 拜殿	
	等 鳥居	高さ8尺・明6尺
	境内	
	由緒	創立年不詳
	境内神社	無
三峯神社	位 置	浅間神社の向かって左
	祭 神	
	例 祭 日	10月16日
	社 本殿	
	殿 拜殿	
	等 鳥居	
	境内	
	由緒	創建年不詳
	境内神社	無

⑦東地区

日賀美神社	位 置	東 1 2 3
	祭 神	素速盞鳴男命 (やすさのおのみこと) 大物主命 (おおものぬしのみこと)
	例 祭 日	10月16日
	社 本殿	5m ²
	殿 拝殿	30m ²
	等 鳥居	高さ8尺・明6尺
	境内	944m ²
	由緒	創建年不詳
	境内神社	金刀比羅神社、鈴石神社、稲荷神社、火産霊神社、山神社
金刀比羅神社	位 置	日賀美神社内
	祭 神	大物主命
	例 祭 日	10月19日
	社 本殿	間口4尺・奥行6尺
	殿 拝殿	間口3間・奥行2間
	等 鳥居	高さ1間・明5尺
	境内	488m ²
	由緒	
	境内神社	昭和36年、旧村社日賀美神社へ
鈴石神社	位 置	日賀美神社内
	祭 神	菅原大臣
	例 祭 日	
	社 本殿	間口2尺・奥行3尺
	殿 拝殿	
	等 鳥居	
	境内	
	由緒	
	他よりの合併	明治8月本村字石神より遷祭
稲荷神社	位 置	日賀美神社内
	祭 神	保食命
	例 祭 日	10月16日
	社 本殿	間口3尺・奥行4尺
	殿 拝殿	
	等 鳥居	
	境内	
	由緒	創建年不詳
	他よりの合併	明治12年8月本村字井戸より遷祭
火産霊神社	位 置	日賀美神社内
	祭 神	火之迦具土命 (ひのかぐつちのみこと)
	例 祭 日	
	社 本殿	旧間口2尺・奥行3尺
	殿 拝殿	
	等 鳥居	
	境内	
	由緒	創建年不詳
	他よりの合併	明治12年本村字深山より遷祭
山神社	位 置	日賀美神社内
	祭 神	山之神を祀る石室あり
	例 祭 日	
	社 本殿	
	殿 拝殿	
	等 鳥居	
	境内	
	由緒	
	境内神社	無

⑧千代田地区(麻機遊水地近郊の1部地区)

諏訪神社	位 置	南沼上994	
	祭 神	建御名方命 (たけみなかたのみこと)	
	例 祭 日	10月16日	
	社 殿 等	本殿	3.3m ²
		拝殿	24.75m ²
		鳥居	
	境内	762m ²	
	由緒	創建年不詳、寛政9年に再建	
境内神社	無		
神明宮	位 置	南沼上823	
	祭 神	天照皇大御神 (あまてらすすめおおみかみ)	
	例 祭 日	10月18日	
	社 殿 等	本殿	3.3m ²
		拝殿	19.8m ²
		鳥居	
	境内	241m ²	
	由緒	創建年不詳、寛政年間に再建	
境内神社	金比羅神社		
神明社	位 置	川合690	
	祭 神	天照皇大御神 (あまてらすすめおおみかみ)	
	例 祭 日	10月17日	
	社 殿 等	本殿	5.9m ²
		拝殿	19.8m ²
		鳥居	
	境内	1,200m ²	
	由緒	創建年不詳、天正2年に再建	
境内神社	山神社、水神社		

(資料：千代田誌)

b 寺院

地 区	寺院名	地 区	寺院名
①池ヶ谷地区	桂林寺	④北地区	瑞雲寺 智徳院 円光院 喜相院 (廃寺) 西光寺 (廃寺) 霊仙寺 (廃寺) 光明寺 (廃寺)
②有永地区	聖樂寺 聖樂寺和観音堂 桃隠寺 大音寺 (廃址)		
③東地区	東林寺		

①池ヶ谷地区

桂林寺	位 置	池ヶ谷字西ノ谷153	
	宗 派	曹洞宗 天徳院末	
	開 創	寛永2年	
	本 尊	聖観世音菩薩	
	建 造 物	本堂	100m ²
		庫裡	60m ²
		東司	2.7m ²
	境内	1,352m ²	
地藏堂	2.9m ²		

②有永地区

聖樂寺	位 置	有永453
	宗 派	臨濟宗妙心寺派 大岩臨濟寺末
	開 創	享禄年前
	本 尊	聖觀世音菩薩
	建 本堂	132㎡、間口2尺、奥行3尺
	造 庫裡	105.6㎡、間口2間、奥行3間3尺
	物 東司	大正元年鳥居の新設
境内	504.9㎡	
聖樂寺和觀音堂	位 置	有永888-2
	開 創	不詳、元文二丙辰年3月再建、宝曆元辛未年11月再建
	本 尊	聖觀世音菩薩
桃隠寺	位 置	有永449-2
	宗 派	臨濟宗妙心寺派 聖樂寺末
	本 尊	藥師如来
	建 本堂	
	造 庫裡	
	物 東司	
	境内	109㎡
その他	明治5年廃寺となり、個人の物置として現存	
大音寺(廃址)	位 置	有永728

③東地区

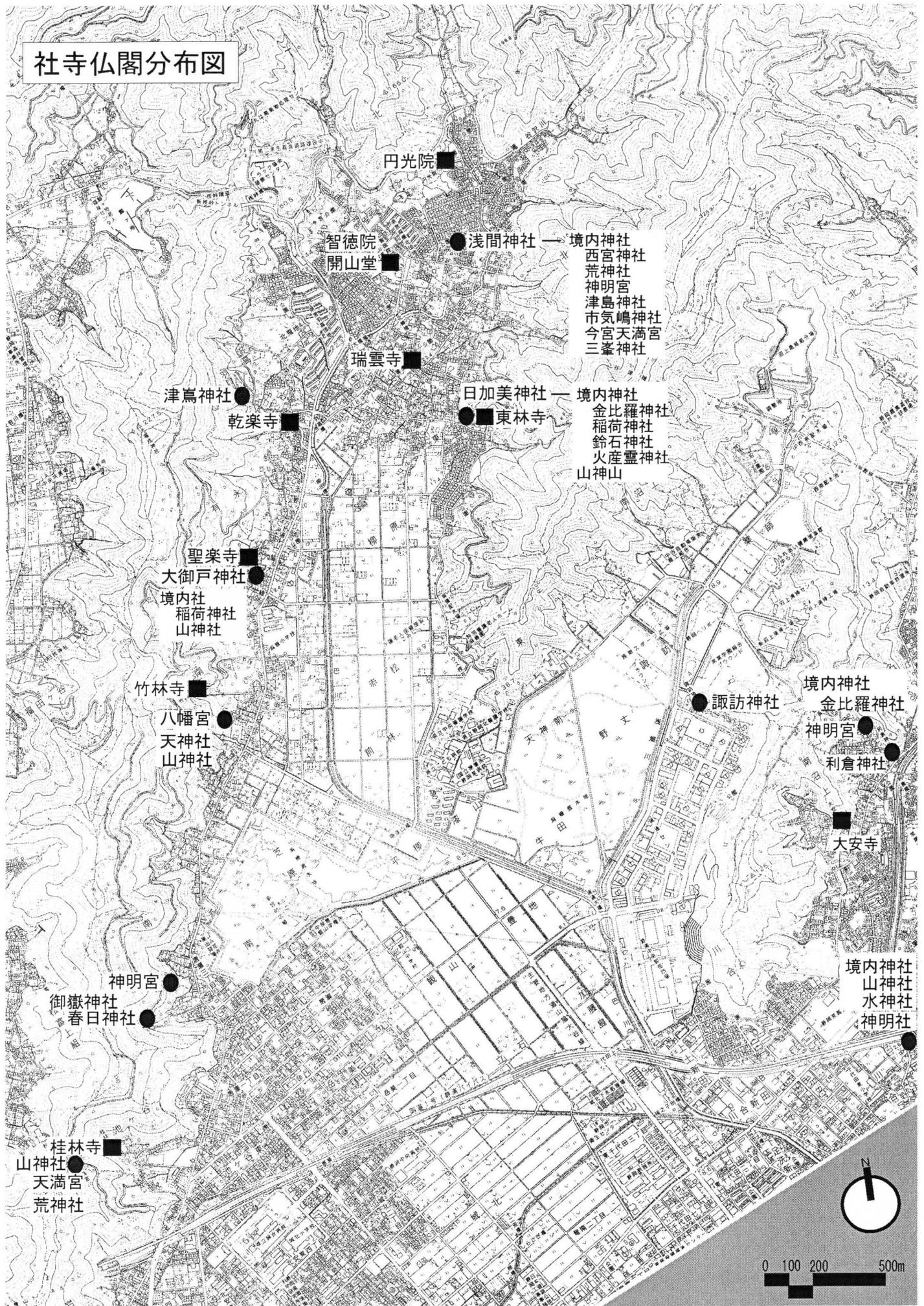
東林寺	位 置	東字奥ノ谷1344
	宗 派	曹洞宗 天徳院末
	開 創	永亨7年
	本 尊	阿弥陀如来
	建 本堂	107㎡
	造 庫裡	26㎡
	物 東司	3.2㎡
境内	1,418㎡	

④北地区

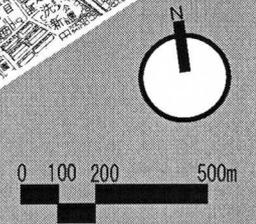
瑞雲寺	位 置	北字中条277-1
	宗 派	曹洞宗 天徳院末
	開 創	不詳
	本 尊	虚空蔵菩薩
	建 本堂	
	造 庫裡	
	物 東司	
境内	990㎡	
智徳院	位 置	北字大日前440
	宗 派	真言宗醍醐派 三宝院末
	開 創	正徳元年
	本 尊	最勝不動明王
	建 本堂	明治36年建立
	造 庫裡	明治5年建立
	物 東司	
境内	585㎡	
円光院	位 置	北字才光寺1661-1
	宗 派	
	開 創	未歴
	本 尊	阿弥陀如来
	建 本堂	縦9間半、横8間
	造 庫裡	縦15間、横3間半
	物 東司	
境内	725㎡	
その他	開基徳川家康公	
喜相院(廃寺)	位 置	北字中ノ条276
	宗 派	曹洞宗 天徳院末
	開 創	不詳
西光寺(廃寺)	位 置	不明
靈仙寺(廃寺)	位 置	谷津769
	宗 派	曹洞宗 天徳院末
	開 創	不詳
	本 尊	阿弥陀如来
光明寺(廃寺)	位 置	北字瀧ノ谷
	宗 派	黄蘗宗 向敷地不動院末
	開 創	不詳
	本 尊	石仏不動明王(伝弘法大師作)

(資料：麻機誌)

社寺仏閣分布図



凡例 ● 神社 ■ 寺院



(5) 産業

【麻機地区】

①麻機の田んぼ

戦国時代が終わり、世の中が安定してくると人口も増え、各地に次々と田んぼが開かれていく。

〇〇新田、という地名の多くはこのころに開かれた村であることを示している。中世までは山裾や谷川に沿った田んぼが多かったのに対し、近世になって平野部に開かれた田んぼには、常に洪水の危険がつきまっていた。江戸時代以降、巴川流域の洪水対策が大きな課題になったのも、こうした社会の発展が背後にあったからである。

(資料：記念誌 大谷川放水路)

②農法の変遷

耕地は幕末から明治までは因習的で農業の方法も殆ど変化はない。小農式で分散していて作物が集団している所がない。耕法も鎌鋤と人力農業で、これが機械化されたのは、明治末年、日露戦後お茶の粗揉機が発明され、大正半頃、精揉機が現われ、製茶が機械化され、それまで茶摘みは、一切摘取式だったものが茶刈りはさみによって機械化された位のものであった。

耕耘機の利用されだしたのも全く戦後である。耕地の改良も全く同様で水田を改良して蜜柑園としたのも戦後である。電動機が部落へ来たのは大正6年で、これを起点として各部落に導入されるようになり、実行組合的協同作業場として茶工場が動力化され、その後、昭和にはいって稲の脱穀調製が動力化されるに至った。

江戸末期から大正初頭まで秋の取り入れは、すべて手作業でありモミスリは夜間の作業とされ「よなべ」と称していた。その疲労のほどがしのばれる。

(資料：麻機誌)

③山地利用の農業

麻機山は賤機丘陵の東麓と竜爪南麓を総称してこのようにいうが明治の始めまでは殆んど雑木林であり竜爪南麓(北村山)は一面の草生地であった。賤機山の雑木は概ね薪にしかならなかった。雑木のうち「どくえ」という木はあぶら木と称し当時の燈油原料であった。

茶が輸出産業として浮び上った明治初年、村人はこの雑木山を開墾し、茶の栽培をはじめた。今日、山は一面に段々畑に開墾されているが、明治中期から末期にかけ茶の木の間には桑を植えて養蚕を副業とした。

麻機には江戸末期に蜜柑の木は稀に見られたようで、古い記録が有永の佐藤長明氏の家に残っていたことからわかった。しかし、これは俗に小ミカンと称する系統のもので温州蜜柑ではない。

温州は日清戦前後庵原郡から入って来たもので、これを栽培しはじめたのは明治34年頃であって、柑橘園を作ったのは日露戦争後である。その後茶園を柑橘園に変えるなど、新しく開墾して植樹したのは明治末期から大正年間であった。

柑橘の売れ行きが活発になり、主要産業になったのは昭和以降である。明治31、2年の頃、有永の織田喜作、狩野新作の両氏が紀州などの蜜柑地を視察しネーブルオレンジの苗2000本をもたらし、これを村中に配布したことは画期的なことで、これにより柑橘栽培の気運がいよいよ盛んになった。ミカソの麻機として脚光を浴びることとなった。

日露戦後から明治の未迄、羽高の森孫平治・杉山雄作氏等が実際家として栽培成績をあげたことは模範とすべく又柑橘篤農家としての古谷三郎氏、接木の名人滝太郎氏の貢献も銘記すべく、産業組合に柑橘部を設け、更に柑橘販売委員会が販売事業に努力したことが柑橘生産事業隆盛の基をなしたとすることができる。

(資料：麻機誌)

④沼地の農業

南八ツ口から時ヶ谷前面の沼地はヨシと眞菰に覆われた広大な湿地帯で海拔7mぐらいと言われていた。それでも昔から開発が試みられて其のヨシと眞菰の中に畦があって地積番地が整っていた。畦と言っても膝までもぐる処が多く、ゆさぶると広範囲の土地がゆさゆさとゆれ動いた。即ち浮島状態であった。泥の探さは数十メートルとも百数十メートルとも言われて、正確な点は不明である。

この沼地の東南側は、昔、安倍川の支流が通っていたため、少し掘ると砂利砂が出てきます。今でも石田・日焼けなどの地名が残り、現在では良田から宅地へと転化してきました。その安倍川の瀬と賤機山の山すその間が水はけの悪い低地で、何万年か眞菰などが生い茂り、大水で泥に埋まり、その上にまた、生い茂ると言う事をくり返してきたため、少し掘ると馬糞と言われる眞菰やヨシの腐った残がいばかりが出てくる。

また、大雨が降ると水没して、数日間、湖と化してしまうため、満足な作物は出来なかったのです。それでも貧しい農民たちが稲を植え付けても穂が出なかったり、シイナばかりの小米ぐらいしか収穫がなかったが、十年ぐらいの間には異状天候の年もあって、反収四、五俵ぐらい取れる事もあった。農民はその十年一作を待ちながら、根気よくがんばり続けた。良田の少ない水腐地の農民はそうしなければ生きて行けなかった。状況の良い所は蓮根田で、腰まで浸する泥を三本歯の手鋤と素手で掘り起す仕事は非常な重労働ですが、やわらかで深泥の中で育った麻機蓮根は全国でも有数の良品として好評を受けている。

(資料：麻機誌)

⑤特産物としての蓮根栽培

麻機地区における商品作物は、古くから栽培され時代の移り変りと景気変動で、その作物の経済的価値の浮き沈みによって大きく塗り替えられてきた。麻機農業は稲作を基盤として、みかんと茶を中心に展開され、蓮根栽培はこの地域の特産物として広く知られているものである。

蓮根も他の農作物と同様に、その栽培起源は確かな記録がないため定かではない。駿河国新風土記によれば、「浅畑沼ニ鬼蓮ト言アリ、此実ヲトリテ食料トス、又其実の木蓮子ノ如キモノ珠数ニツタル・・・」とあり、栽培されたものかどうかは別として、浅畑沼周辺に存在していたことを物語っているし、旧千代田村の古老の説によれば、天文八年頃といわれる。「静岡県特産物調査」(大正四年 静岡県農会)では、文久年間に甲斐より種蓮根を購入し、繁殖させて上土蓮根の名を高めたと記されている。蓮根は明治に入り、豊田村長沼・古庄等で盛んに栽培され漸次千代田村にも伝播し、同地域が蓮根栽培の中心的存在となった。豊田・千代田・麻機地域一帯は、安倍川扇状地の東北に広がる「麻機低地」に位置し、巴川の上流にあって地表直下数メートルから10メートルに及ぶ軟弱な泥層が分布する。この泥層は微細な泥と植物遺骸で有機質を含んでいるため、蓮根栽培にとって重要な土壌要素となっている。

麻機に蓮根栽培が伝播したのは明治中期で、この頃は主として自給的なもので商品化されてもその範囲は自ら限られたものであったと思われる。麻機は、恵まれた立地要素もあって、明治末期に本格的な栽培に入った。

大正期に入ると 麻機村の場合、注目すべきは総収量の93%が商品化され、販売されていた。明治36年、麻機街道が開通し県道になると、農車による運搬が可能となり、販売も容易になった。殊機には、みかんや茶など商品性の高い作物が栽培され、販売されていたことは、蓮根の生産及び販売にとって無視することはできなかった。

「麻機低地」での蓮根栽培の中心は、浅畑沼周辺であったが、伝承によれば、昭和初期に千代田村一帯の蓮根田に腐敗病が大流行して全滅状態となり、その後は麻機が主要栽培地域となった。

この時期の蓮根は長蓮根が主体で、長蓮根は成長が早く、葉は大きく丈も高いため多少の雨で蓮根田が冠水しても、成長が早いため意外と強く、長蓮根は広い範囲で栽培されるに至った。反面長蓮根は味が劣り、あくも強い。そのうえ収量の多い割に関節が細く、採掘の際折れ易い。従って市場での評判も芳しいものではなかった。昭和10~15年頃、長蓮根に代って、ダルマ蓮根に切り替え始めた。

麻機のダルマ蓮根は、有機質を含んだ湿田地帯で栽培されたため、味も他産地のもの比べて貼りがあり、適度な硬さと甘みをもっている。大正時代の麻機蓮根は、商品化傾向が強かったとはいえ、静岡市場では甲州産や遠州三河産に押されぎみであった。

一般に蓮根栽培の展開は、地形・地質に限定されるものの、米価の騰貴によって、米作が卓越し、蓮根は漸次削減されている。

麻機地域の場合は、「麻機低地」が米作より蓮根栽培に通し、米価に関係なく耕作された。蓮根栽培は、他の農産物栽培と違って、百年近い栽培歴史を有しながら、栽培技術・機械化等の面での発展は、きわめて鈍く、伝播当時と全く大差ない程である。特に蓮根栽培には機械の導入は不可能であり、あくまで人力に依存している。採掘道具も、スジ切り・万能鍬及手万能等は蓮根栽培史上、何ら発展せず現在なお使用しているのである。昭和40年に洗浄機(収穫した蓮根を洗浄する機械)が出現したが、普及せず消えていった。昭和34年に麻機蓮根委員会が設立され、栽培農家の経済の安定化を図り、地域全体では、全農家数の44%を占める160戸の農家がこの組織に参加し、南地区では大半がこれに加わった。

麻機地内の蓮根田越石面積(麻機地域外の蓮根栽培農家が麻機池内に入り作る栽培面積)は全く明らかにされていない。実質的には、かなりの入り作はあったと推定できる。逆に麻機地域の農家が他地域への出作りはほとんどない。資料によれば、蓮根田の面積は年々減少し、委員会設立当時、約18haが、45年には、作付面積10haに、51年には、8haと減少している。

(資料：麻機誌)

【千代田地区】

①山間部の産業

北沼上本村から南沼上にかけては水田がひらけ、稲作農耕が行われているが、同時に茶バラやミカン山を手広く経営するなど山村生活の様相を呈している。

当地域における畑作農耕の展開は表のとおりである。山地農業の特色は常畑と焼畑とを併行して経営することにあった。双方は相補完し合う関係にあり、焼畑ではおもに雑穀栽培を行った。焼畑農耕は明治末にいたるまできわめて重要な生活手段であったが、大正以降次第に衰微し、太平洋戦争後の昭和30年ごろには終息をみた。

明治期から大正期にかけて桑とカンゾの栽培が盛んであった。これに伴って養蚕と紙漉をした。

昭和期にはいると茶とミカンの栽培にとってかわり、それら伝統的な産業が衰微に向かった。この時期は林業の最盛期で炭焼きや木出し（伐採搬出）を盛んに行った。

戦後はミカンが好況となり、山家が大いに潤った。耕地ことに水田を平地に買い求め、出作りを行うようになった。ミカン栽培が拡大され、かなりの経営規模に達したところで、生産過剰となり、昭和50年ころから急に斜陽化した。これに代わって茶栽培が隆盛を極める。

②平地部の産業

平地村（田所） 千代田地区の大部分が平地村である。田所の呼称が示すように田園地帯である。当地域一帯は安倍川の後背湿地で、川や沼が多く湿潤である。浅畑沼に発し支流を集めて流れくぐる巴川は俗にいう沼川で、出水の度に長尾川の水が逆流するなどのため流域の開発が遅れた。「新田」のつく地は江戸時代の開発になったものである。

長年の^{しゅんせつ}浚渫の結果、かつての沼田も大部分乾田となり、人々は安んじて生活できるようになった。それとともに巴川の相貌もすっかり改まり、かつて、水郷だったために畑が少ない。屋敷周辺に野菜畑がある。そのほか、郊外北辺の浅畑山や南に横たわる谷津山から愛宕山にかけての斜面に茶バラやミカン畑を各戸とも数反歩ぐらいつつ耕作している。

田所は田園経営を専業とした。夏期の稲作に加えて、冬期には麦作、初夏にはジャガイモの裏作を行った。ただし、近年は野菜、イチゴのハウス栽培に転換した。

田園における麦作は、近世以来昭和30年ごろまで行われたが、規模は平均して一町そこそこの経営でしかも小作地が多かったため、ムギは重要な食料であった。裏作は年貢の対象とならなかった。太平洋戦争勃発から戦後の復興期にかけて食糧が窮乏したため、ジャガイモの栽培を盛んに行った。そのころは値もよく、ジャガイモ一升米一升という時期があった。

ところでムギ・ジャガイモともに湿潤を嫌うため、湿田の多い田所においては作付地が限られた。巴川の流域の川合・上土近辺では深田において蓮を栽培した。現在でもところどころに蓮田があるのはその名残りである。

■産業の推移表

【山家】

区 分	大正末期まで	昭和初期～戦中	戦 後	現 在
農業経営	焼き畑経営 雑穀・粗放栽培 田畑経営 商品作物栽培 養蚕 次第に衰退	焼き畑経営 田畑経営 商品作物栽培 ミカン栽培拡大期	焼き畑経営 終戦直後一時盛ん になったが、27,28年 頃から衰退	田畑経営 商品作物栽培 茶最盛期 ミカン減衰期に入る
栽培作物	<焼畑> ソバ、アワ、アズキ、 マメ、コムギ、オカ ボ、イモ <素畑> 麦、サツマイモ、キ ビ、ミカン、トンモ、オ カボ、野菜 <田> 稲、麦 <商品作物> 茶、ミカン、桑、コン ニャク、カンゾ	<焼畑> ソバ、アワ、アズキ、 マメ、コムギ、オカ ボ、イモ <素畑> 麦、サツマイモ、キ ビ、トンモ、オカボ、 野菜 <田> 稲、麦 <商品作物> 茶、ミカン、コンニャ ク、カンゾ	<焼畑> ソバ、イモ <素畑> 麦、サツマイモ、イ モ、トンモ、野菜 <田> 稲 <商品作物> 茶、ミカン	— <素畑> イモ、トンモ、野菜 <田> 稲 <商品作物> 茶、ミカン
林業・農間稼ぎ	木出し、炭焼き、紙漉	木出し、炭焼き、紙漉		
家畜	馬	馬		

【田所】

区 分	大正末期まで	昭和初期～戦中	戦 後	現 在
農業経営	/	田畑経営 田圃の裏作盛ん 商品作物栽培	田畑経営 終戦直後一時盛ん になったが、ほどなく 衰退 商品作物栽培	田畑経営 田圃冬場のハウス 栽培 商品作物栽培
栽培作物		<素畑> 麦、サツマイモ、イ モ、野菜 <田> 稲、麦、ジャガイモ <商品作物> 茶、ミカン、木綿、蓮 根	<素畑> 麦、サツマイモ、イ モ、野菜 <田> 稲、麦、ジャガイモ <商品作物> 茶、ミカン	<素畑> イモ、野菜 <田> 稲 <商品作物> 茶、ミカン
林業・農間稼ぎ		湖沼及び河川漁業、 蓑笠編み	蓑笠編み 注連縄づくり	蓑笠編み 注連縄づくり
家畜		牛		

(資料：千代田誌)

(6) 民俗

①レンコン栽培

麻機沼周辺における低湿地帯の環境を生かしたのがレンコン栽培である。ここでは、レンコンの収穫にあたって体が泥に埋まってしまうように、大きな下駄を履いた。いわゆる田下駄である。田下駄は日本各地の湿田で使用されていたが、乾田化が進んだために珍しいものになった。

麻機と自然環境がよく似た浮島沼周辺（沼津市）では、今でも、稲の収穫時に使われている。そこではナンバと呼んでいるが、コンバインを操作する人がこれを履いている光景をみると、胸までつかって田植えをした、辛かった農作業の一端をしのがことができよう。麻機沼と浮島沼という県下の代表的な湿田には、もうひとつ共通点がある。

田んぼが流れる、たとえば、洪水で冠水する意味だ。ところがこの沼周辺の田は、本当に流れてしまった。腐植土の上につくられた田は、増水すると浮き上がって水流に乗ってしまうのだと言われている。

浮島沼ではこのことをウキナガレと言ったそうだ。

そこで、昔は雨がきついときは用心のために、囲い土に杭を打ち、田んぼに網を付けて流されないようにした。これを怠ると田んぼがどこかに行ってしまった。

（資料：記念誌 大谷川放水路）

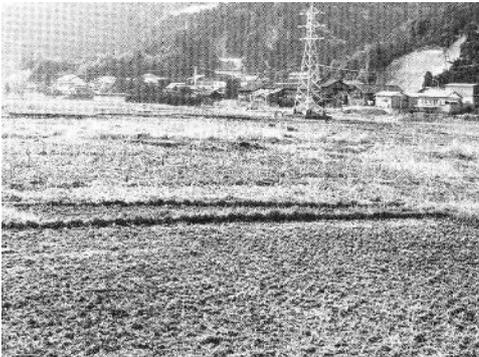
②低湿地におけるフカダとウネダ

麻機沼を中心に低湿地帯が山裾まで広がっていた。この地区の米作りは、その立地する水田状況に対応して、次の3タイプのものが行われていた。

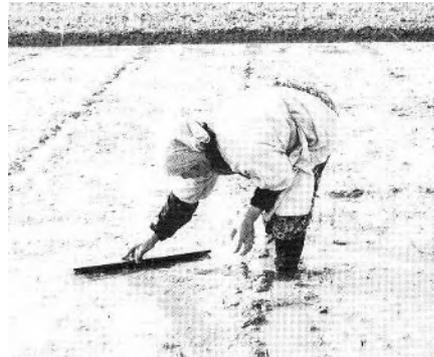
- i 山裾の水田を「オガタ」といい、沢のしぼり水を用水に使っていた。
- ii 低湿地縁辺には「レンコンダ」と呼ばれる深田があり、田下駄を使用した農作業が行われていた。しぼり水と天水を用水に使っていた。
- iii 沖のイカリでは天水だけにたよる粗放的な「ウネダ」が行われ、十年一作のできであったという。この「ウネダ」こそ、沼地開墾の米作りであった。

このような民俗例として残る湿地の米作りの技術に、弥生時代の体験が脈脈と生きていたのではないか。

写真 山裾に広がるレンコン畑（麻機地区）



苗代田のうねにウネダの伝統を見る（静岡市大谷）



（資料：静岡・清水平野の弥生時代 1988 静岡市立登呂博物館）

③田下駄のはたらき

静岡・清水平野から数多くの田下駄があぜにからまった状況で出土している。

これは、田下駄使用后、あぜの上に放置されたことが考えられる。

田下駄の使用を民俗例に探ってみると、静岡付近でも「深田」で盛んに用いられていた。農民は、「深田」のことを「足の落ちる田んぼ」と表現していた。ももの根っこぐらいまで埋まってしまい、特に、下の方は冷たい水で、足が冷えてしまうという。田下駄を履くと、足が下まで落ちないで、足があったまったということから、田下駄には足の保温機能のある履物であったことを知ることができる。

また、田下駄は、あぜの上の歩行用としても履かれていた。このように、田下駄は悪条件の水田立地に対応して、足の保護や歩行の確保に役立っていたことを、弥生時代の田下駄にも類推してもよいと思われる。

写真左 田下駄を履いて歩く（静岡市麻機）

写真右 使用後にあぜに置かれる田下駄（静岡市麻機）



（資料：静岡・清水平野の弥生時代 1988 静岡市立登呂博物館）

④稲作信仰との系譜

農耕生活にとって、水は豊凶を左右する生命線であり、古来から、水の神を祀ることは重要な農耕儀礼であった。

特に、民俗伝承として残されている池に住まう竜神の信仰は、色々な物語に改変されているが、元は池の主である水の神を祭る信仰行事が発端になっていたといえる。日照りや洪水など、水の神は荒ぶる神として生活を脅かしてきた。水の神、雨の神の化身としての竜神を崇める祭り伝統は、遠い過去に源を発し、米作りを裏打ちする信仰として、稲作農民によって育まれてきたと思われる。

そして、竜神にささげる赤飯の「むすび」こそ、稲作信仰を象徴する食物として、今も生きている。

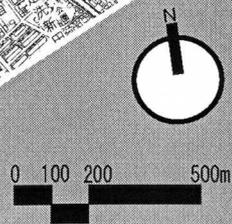
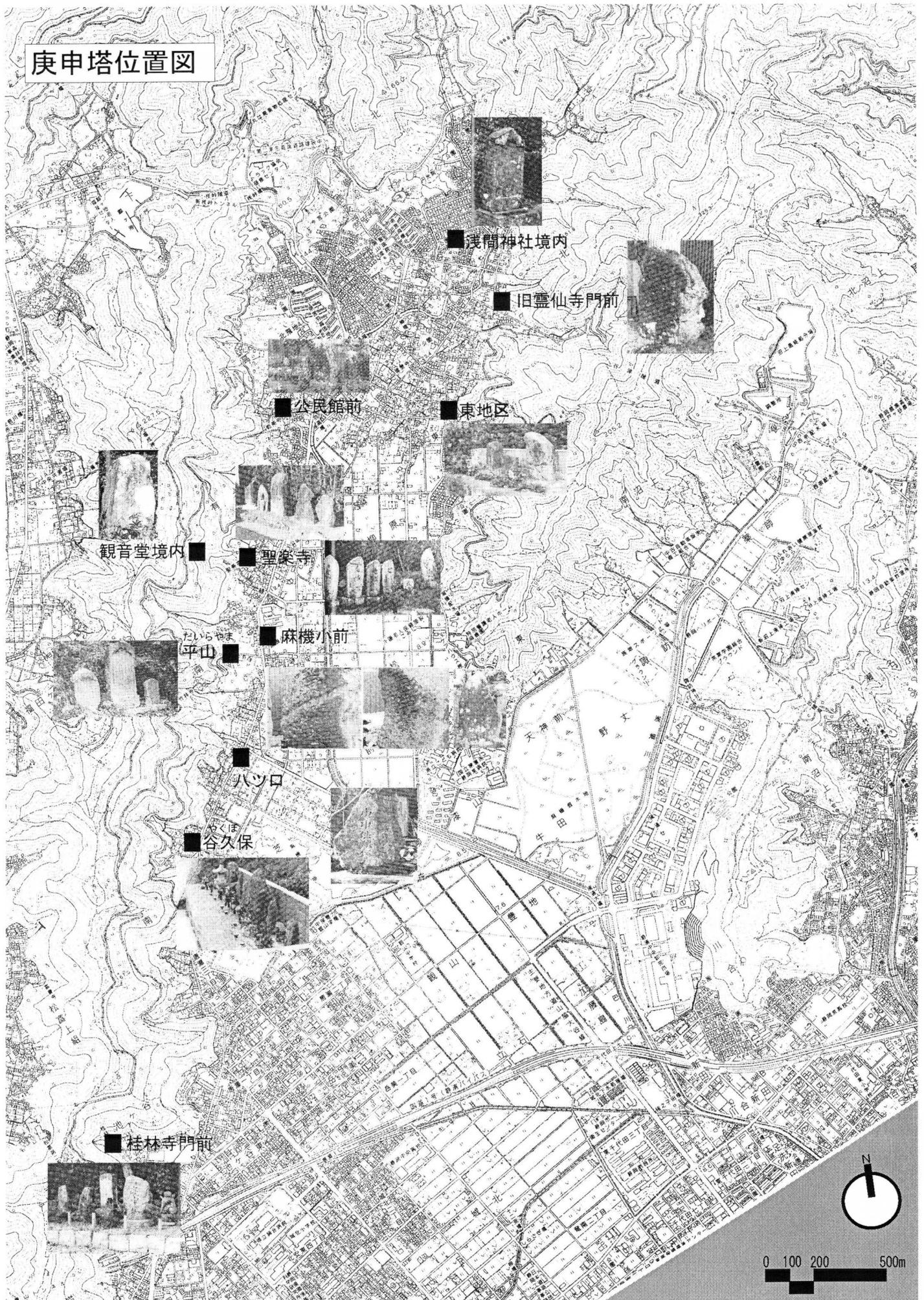
（資料：静岡・清水平野の弥生時代 1988 静岡市立登呂博物館）

⑤庚申講

麻機は庚申講が盛んだったので、庚申塔が昭和53年3月現在19基確認されているが、保存状態は様々である。

（資料：麻機誌）

庚申塔位置図



凡例